

藤川賢明句抄

獸慾に 一列向いた 足なだれ
ソロバンの けたへどかんと 落ちた闇
なめらかに 見せて 欺瞞の 蠅取紙
陥穽の中で 最後の 背伸びする
くらがりに 白紙の 屑がまへる
破裂まで 風船玉の 張る虚榮
信念を 朝の光に 抱いた露
童心に 世紀の色 の サツと 赤
ひもじさの 目には 空虚な 花の色

主義一つ 無くて くらげの 持つ安易
よろほけた 歩み正しく 刻む秒
乳房の 奥に 明るい 心臓
しがみつ くだけの 使命よ 足袋のはぜ
皮下の 血のう なりと 別に 持つ醫
足元の 威嚇を まむし 喰らひ つき
さいころ の 皮肉へ 馬肉すゝり 泣く
さんぎやく に 馴れて まないた カツと 照り
つまづけ ば下駄まで 馬鹿にして 折れる
凡日をと りちらか して 巢へ 急ぐ
りんらく の 淵へ また たく 星と 星

福田壽句抄

熱すまでまたず性の手むしり取る
泣きやめた妻それまでの妻でない
父親の乳吸ふ外に乳はない
居直りの其日に替る婿の膳
あきらめて只ないて居る籠の鳥
運轉手背なかを見せて金を取り
盛装の女冷たく差向い
葉裏から人目をさけて喰い太り
臨月の腹の置場が今にない

何時迄も位牌を持つた時て居る
人好の最後から出る底ちから
服装の階級などは知らぬ俺
眞闇な世で四五人の兒を育て
何處迄も冷い金と温い金
嘘でもうまく云ふたのが勝なんだ
有つたから盗まれたのだ諦ろ
合掌の耳に賽錢箱の音
落る陽の早さに今日も五十錢
白粉の禿げた時こそ復讐だ
だんく^くと悪い所が父に似て

藤井米三句抄

嘘をつく世界に俺は容れられず
眞つ直に行けず歪んで尙行けず
八方美人どつちかへ嘘を言ひ
下之れにならつて上は困るなり
盗泉の水も怖わく飲んで見る
金なんか何んだと金になやまされ
だんぐに金の冷めたい事を知り
腕力も出せず議席で腕を組み
農村救済いつかは俺の財布から
幼稚園世相を他所に鳩ポツポ

福島克己句抄

栓ぬきにかさなり合つた手の熱さ
俄雨うらめしそうな眼で見上げ
不景氣を始めてしつた若い妻
一年生一字々々にいきをつき
工場をおわれ明日はどこに行く
青空に眼一ぱいの星光り
三勇士端午の仲間一人ふえ
電柱のピラメイデイの眼が光り
はりきつた乳房に田植のび上り
植付がすんで平和な村になり

小森狂夢句抄

門松は向ふの山に植えて置け
 叱られる子に世の中は味方する
 芝居見るだけの涙が何になる
 母性愛父に淋しい日が残り
 一隅に萌え一隅に枯るゝ草
 牛馬なら鱈腹食ふて草に寝る
 戦ふまいと後手にピストル
 (時事吟)
 どの蟲も鳴きに生れた様な秋
 するくくと闇に解けゆく帯のたけ

どの色に染めて落ちつく秋多情
 別荘の敷地に買はれゆく田畑
 狂人のせゝら笑ふが羨まし
 一碗の飯とは名のみ残り飯
 邪まな戀にも赤い血が燃える
 込合ひますから央の方へ益々込合ひ
 蝶々に怖く見られる花の主
 つゝましく待つ順番へ日が暮れる
 ハンマーを握るその掌を戀にくれ
 働いても食へぬ現實にうろたへ
 眼が眼が眼が逃げ場のない裸體

越田久水句抄

反抗を秘めて血管たぎるのみ
 ある時に馬の不平は鳴くばかり
 尖風を切るきつ先に大衆の血
 奮激の底にはつきりと眼を見た
 凄刃の下に濁らぬ血が走り
 まなざしを張つて憤怒の光る牙
 脱ぎ捨ての下駄に感謝を包む胸
 陰險な冬の真下に集ふ首
 満たされぬ心に暮を喘ぐ息

葱切れれば葱の怒りに眼を突かれ
 追ひつめし世帯に歪む嘘の口
 闘争のあわたししさへ慰安會
 垣の無い人格に一座和み在り
 束縛もなく敢然と大樺(劍師に面接)
 逃げ延びた門へとぐるを卷いた飢
 人生を醜く擴げ黙しきる
 尖心のするどき秋のあばら骨
 陰忍の腫うるみてやゝしばし
 躍り出すものを壓して鍵の音
 鶴嘴に汗ばんでゐる眞摯

小池蛇太郎句抄

冷笑

メーデーを横切つた生白い背廣
帯間に似た饒舌に詩は易し
無抵抗で無技巧で性の倦怠
冷笑の中に見る見る殖えて行き

無神論

稻妻となつて世紀の闇を衝き
ぞろりつと坑を上つた尖鋭化
逆らへぬものを起重機又くわへ
人が墜ちてポカリ熔鑛爐の青火
フツ飛んだ命が廻る大ベルト
血を吐いて坑でくたばる無神論

或る怖れ

ビツタリ屏して首切り會議
 銃口の眞つ直ぐ向ひた明日が待ち
 黄金を鎧つて彈丸を怖れ
 日輪を怖れる賣春婦ともぐら
 眞理を説くにさそりの如く怖れられ
 獄壁に手まりの如く彈かれし

小門半門句抄

母の手温かければ貧しきもよし
 不甲斐なき吾れと吾が影夜の底
 力あるものはそれでも力づく
 宿命を嗤ふ女に耳飾り
 娘の夢の儂さに野良の現實
 まだ稼ぎ足りない支那の子に暮れる
 働いて働いて悲し都會の灯
 人間の脆さへ神がそのあたり
 五十年半分程は夢を喰ひ
 人間も所詮死に行く星の數

甲野狂水句抄

尖端や太古の儘の瓜と茄子
 浮世繪に祖先の顔のあとけなさ
 刻々に變る思想の後とや先き
 プロダブルだ蚯蚓の嚙言だ
 戸、障子に對す嬉しや日本主義
 絶言
 絶景
 金そのものは卑しくない
 人を集めて語る事なし
 満足してゐるんぢや無い無言
 過ぎ去れば消ゆる姿の友ばかり

(昭和六、七年作)

甲野きく子句抄

下駄箱の隅に幾年かを黙し
 爽かな葉音を立て、秋がゐる
 冷たさをじつと耐らへた爪の色
 野に咲いたばらの花とは見えぬ色
 温順しく壁に映つて居る心
 重石は何を語つて隅にゐる
 ほろく、と涙を追ふて夢が覺め
 どの雲の下が故郷の土だやら
 遠ざかる心の底に觸れてみる
 母と娘と語り合つてる窓の月

(昭和四、五、六年作)

小宮骸花句抄

火田民星と列んで灯して居
 盲愛の綱に疲れる犬の感
 血で書けるものに俺等の日章旗
 龍骨の浮べる限り持つ力
 陽炎へるあたり乞食物を干し
 誘惑に克ち朗かな朝の膳
 失業のたゞ食ふ丈けの慾に止め
 唄はれて白痴の戀の麗はしき
 底力白だんぐとチビて行き
 向つ腹立てゝ寂しい雨夜なり

小林秋人句抄

忍従の底に涙も涸れ盡し
 豊作の村に餓えたる過半数
 せめて子の腹だけ足れよ雑煮餅
 貧しさの中に吾が子と唄ふ夜
 懸命にいけにえになる兒を育て
 軍國の足下に裂けた手擲彈
 殺戮の地へとどかない神の聲
 温情の假面の下で牙を研ぎ
 偽りもなくゴミ溜に咲いた花
 疲れ切る身へ太陽の容赦なく

兒玉津根三句抄

ブルの娘に今日もちらほら陽は暮れる
 春にそむきこ座敷牢が立ち
 孤獨からぬけ出て人の春へ來る
 花よりも團子の方を得んとする
 ぬすと猫眞晝を椽の下に夢
 パラ／＼にされた體で録をとぐ
 酒を呑む事をおほえただけの春
 春だナ一三面記事が飾る春
 アパートに燃ゆる心の二夕世帯
 拳骨を二ツかためて前に立つ

小林白鳳句抄

水溜りたまりて水の色となり
 森を出た二人夕陽をまばゆがり
 抱き締めたまんま溶けたい戀の慾
 どぶ水が蠢めく何か生きてゐる
 ひそやかにあたりへ秋の忍びより
 × × × × ×
 饑餓線へ追ひ詰めパンを一ツやろ
 苦しみは晦日晦日に大晦日
 聯盟の眸に日本カキ色
 滿洲の礎石に遺る勇士の名
 業火いま我資本家の門に燃ゆ

河野鬼策句抄

あきらめて書いた履歴書で採られ
心情がやつと知られた今日
忍従が憤怒にかわる極左
燈火の消えた後の寂莫
口笛の其誘惑のいと甘く
眼前の銭が握れず汗をかく
ガツチリ組んで明日へ行進
人目を封じた戀の交歡
門を堅く閉して尙ほ見張り
樂々と統計に乗つてる失業者

綾井龍五郎句抄

活殺が自由とまでを五十年
肺肝を指すエキス光線の威力
雄大な聲に群獸の如く黙り
結ぶ實も無くて大樹の立ち枯れる
金口が口紅の魅惑にひたり
暴落で漸く餅が食へる
踏まれてゐる石段の壯嚴
失業苦的なしに走る彗星
泥を立派に塗る左官
智囊才力經綸が待つてゐる

安藤醉月句抄

にんまりと金齒の隙をもる邪淫
 人間の常軌を小石愚弄する
 人間に神を生めとの夢の告げ
 刑務所に假寓浮世とちがふ飯
 ボーフリが今に蚊になるドブの歌
 暗礁に船の意識をたかぶらせ
 ひれ伏して只だ土だけを見る腫
 蟻螂の斧にたぢろく豚の鼻
 失業の俺をなぶるな春の風

片言まじりオトウチャンクビキラレタ
 誰が何と言はうと總理大臣
 冷血な良にマンマと義手義足
 不合理と自分は知らぬ檻の虎
 一年の袂糞から見る自責
 萎縮した乳房に縋る兒の腫
 理不盡に打てば板割れ釘曲る
 この坂をめくらの癖に高足駄
 戸袋に重なつて居て夜るをまつ
 斬り捨て御免の昔ならいざしらす
 刑務所で死んだ佛が世に出され

相澤勝平句抄

飢え切つた腹の底から出る眞理
階級もなく素つ裸の親し味
盲従ときめて世相のほがらかさ
正當な道は日給五十錢
朗かに吹く口笛の二重奏
寂心の中に白痴の無表情
貧乏が親しむ土のぬくもり
伸びくと春に親しむ二十八
漠然と春に戸惑ふ北つ風

感覺の春に疲れて唯搾取
信じ切る二人と成つて唯黙し
平凡を信じて抱く飯の味
赤裸々に唯感激のペンのあと
今日も又ペチカに寄つた同じ顔
安眠をむさほりきれぬ金の音
足の向く儘に歩けるルンペン
安らかに土に親しむ夜のルンペン
留置場の壁へコツコツ物語り
米倉の前でルンペン野たれ死に
かちどきに疲れ切つてる沈黙

相澤學人句抄

ハンドルへ今日もひだるく縫りつき
裏切つてから存在を認められ
押しよせる不満に脈の亂調子
奮然と眞理左側へ向きを替え
動脈のビクリくと浮いた腕
もぎ取つた俵重たく倉へ積み
たんまりと吸つて乳房をつきはなし
ぶち込んだ斧をがつしと木の憤怒
留置場の今日から安く飯を喰ひ
米櫃をまんなかにして睨み合ひ

阿部俊一句抄

どしや降りに傘を持たない俺を見よ
ある日ふと破れた鏡に自己を見る
すてられたすべてが土となつて活き
屠殺場までもついて行く馬の蠅
絶頂のあまり尖りて近寄せず
かな網で張肱をする仁王尊
血にまみれ地にかくれして縫ひ上げる
白壁の土藏の外は飢へて居る
ありし日のするさを似せぬデスマスク
又母は米喰つた日を繰つて見る

青木富士雄句抄

純情をすり減らしつゝ人格者
灼熱の陽にうなだるゝ白い花
あふ向けに寝たまゝパンを待つてゐる
はうり落つ涙を母の胸に塗る
滅亡の日へひたすらの資本主義
胸板の奥に冷たいメスを持ち
終局の墓が大口開けてゐる
貧しくも今日を支へる朝の膳
薄蒲團明日をつないで只孤獨
突き當る風の儘なる帆の悲哀

齋藤虚空句抄

鶏王に地軸の春を許したり(曉鶏聲)
模範村新味を盛つて根が搖ぎ
屠所までは豚の牝牡一つ箱
どん底で次の時代を胎む腹
人生史頁頁にある欺瞞
狂ほしく假面のかけら見る計り
食ふまいが食はうがおどる春の曲
新緑へ初夏へ情炎燃え盡きず
ビルディング土を忘れし人の渦
凱旋を待つ飢餓線の藁蒲團

佐々木三福句抄

恙く今日も軌道へ戻りつき
 彈道の先きに轉んでゐる生命
 うつかりと榮華を希ふ身をしかる
 搾らふと必死生きんとする必死
 秒針の及ばぬ國のうらゝかさ
 ふみ出す朝の一步にある吉凶
 食ふ丈の道もだんぐ先がほけ
 金故にもろくもひよいと頭が下る
 酒もよし戀もなほよし四十二

一碗の汁にひそんだ朝の幸
 萬骨の上にかざした新國旗
 ぬくくと凱歌を上げる白い飯
 食ふ事が出来ると酒に手がのびる
 こうも思想が違ふきやつ等と
 ルンペンの玉子と見たり鯉暢
 さしのべる手に血まなこの失業者
 街頭へ殻のついてる學士さま
 壯言も彈丸の力に逆へず
 俺達が勝つた爭議へ廻る酒

(犬養首相斃る)

三枝九鳥句抄

激情のままに動いた日の裁き
 尖り立つ石の心に添ふゴム輪
 没落の狂騒曲を夜會服
 積み込んで地主にやらぬ小作米
 黙々と働蜂と言ふ使命
 貞操の脾腹を飢が踏みにじり
 畳まれた本にミイラの蚊が残り
 絶望のかなたへ酒を抱いて寝る
 多恨只新府の山に残る灰
 欠損の深さべろく宿醉
 (懷機山公)

佐藤十九坊句抄

全腦の響きに視神経の行衛
 さんくと陽の降る中に光る鋏
 涙腺が涸れてこんくとたる血汐
 鳩の糞だらけ官幣大社なり
 そのとたんちらりつと裏が出る
 新聞と本をかくして世を見せず
 喰ひしばる三十二枚の理性
 と見せてイキナリ猿にあかんべ
 出口も入口も無い塔を見つめ
 意識いま妻へ氣の毒だと是認

佐野天郎句抄

貞操の残骸がある紙幣の前
髯剃らぬ勇士の頬へ霜ばしら
輪を吹いた煙草の中へ消ゆる戀
投票が済むと小作を負けぬなり
守錢奴の笑顔に金の無表情
失戀に泣く間こそ乙女なれ
米の値はサラリーマンの檢温器
困憊の喘ぐ弱さへ人生の白蟻
和らかく胸の浪打つ奥座敷
大道で蹴つて踏まれて密柑の最後

坂口至陽句抄

信仰の力炎を踏む素足
落葉焚き炎へ秋の陽が沈み
深山へ神秘を添へる春の雨
表札へしばし拒絶の眼を据る
波瀾をも知らず曉をゆする鐘
人間は金に泣いたり笑つたり
セコンドが步調正しく更けて行く
こみあげる涙をそつと拭く
悋氣喧嘩の裁きならよませう
御客にも十人十色の御面相

北村美代子句抄

新妻と云ふ名に膝を折りつゞけ
朗かに歌へ春の子野に山に
言ひにくい答瞳のすんでゐる
思想から思想へ父に似て育ち
誘惑に勝つた寢息の朗らかさ
崩されて怒らぬ積木飽きてゐる
惜敗のバット力なく轉び
秘密でも神はまともに見てござる
境遇が似て居て助けられた話
失業はぬるい炬燵に馴らされる

行弘柳之助句抄

歩けない足で歩けと追ひ立てる
仁術を施こす金の有る患者
トラツクの下に靈長墓のやう
先輩と言はれいつぱし赧くなり
正成を將門にする時代相
御互のモラトリアムへ笑合ひ
宣傳の檢束の夜を丸く居る
觀世捻り自烈たくなる中風やみ
とほうづもない程鈍い大器なり
ミラポ一を越えて大衆先づ進み

目瀬たゞ秋句抄

拳骨をといた互の手の温み
飛越えて飛越えてから潤歩
金貨燦然オンマカキヤロニカソハカ
捕はれし鼠ゑさなど目もくれず
感情へ油をさした脈の音
運命へ縫がる科學の細い針
あすの日を信じ切つたる高駟
羅馬はむかし鼻の高さに亡び
絡み合ふ視線にハッと赤くなる
蹴り損じ下駄空間へ跳ね上り

三澤鴻山句抄

良心に觸れる怖さを振り向かず
相返す味を砂糖と鹽の白
運命を逃れ切れない搾取の手
忍従の鬚華やかな赤手柄
酷使する鞭へ尖つた馬の尻
ハンカチへ小さく羞耻を折り畳み
紙幣束を呑んで金庫の無表情
色褪せた服で恩給追ひつめる
争つた心尖りしまゝに夜
俺達の味方はみんな金がなし

宮崎叫洲句抄

眼かくしへ向いて重たく春がゐる
一線に立てば後からどろどろと
深淵の底の闇さに落る石
信念に最後を捧げた死の無言
打ち込れゆくどん底に杭となり
柩衣の鍛帳がたゝんでしまつた一芝居
大胡坐明日をうなづく彼の社界
黒ずんだ氣笛にとけぬ汗と似て
いつはりも無き發言を止められる

革新の旗に群る破れ靴
聖書もて押し流されゆく世相
鼻先に餌を釣り下げて馬鹿囃子
戦線をのぞく夜明の握り飯
九十九人を斬り捨てる一人にて
盛り上る前夜の歌にある誓ひ
集合へじつと尖つてゐる氣配
辻に叫ぶ昨夜と同じ枯れた聲
引金の前に斃れる迄を持ちこたへ
村正に武者振りついた人の錆
差縫の靴下に強きタラップ

三代川瓶一路句抄

還曆はどうでもよい初孫の節句
 生きたさに第一のもの賣る世相
 何べんサインしてもあいつは愚鈍
 一錢で顔を地面にすりつける
 アツといふ前に自動車衝き當り
 足を踏む誘惑の手
 公然と話しながらも秘密
 偽りの裂目にそつと土を塗り
 梯子酒のあした現實の悲哀

新谷七日堂句抄

一金三百萬圓也三井
 没落の名残を建てた石に見る
 金持の卓説を聞く會社員
 變心を嘲けられても金になり
 反抗の前に金貨を光らせる
 かつちりと齒に反抗の飯の石
 くらがりの肩に甲斐絹のすべる音
 殺す氣はなくぶちのめし
 さとる殻蟲は何千年前に死に
 淀君のおしろいの底生地の皺

直原那岐坊句抄

坑道へ地上の春を背むき入る
ひたぶるに只點をとれ點をとれ
貼つけてあるピラへひそく迫る闇
鬭争の朝へガラリと戸をあける
電球を壊したやうな戀の果
取り木した柳根を張る三十年
しがみつくと土から大根引き抜かれ
飢えきつた頃拳銃を與へられ
しやべらせてから一票で裁く

喜捨帳へついに不肖の子であつた
踏み締める俵地主へ行く化粧
もうよせと箸と茶碗をとり上げる
のび切れぬゴムの憤怒にある世相
ドイツだといへばアイツと顎が言ひ
平蜘蛛の何をおどく壁を這ふ
兎も角も未完のまゝに明日を待ち
汝等と遊ばぬ乃公に金があり
蹴破つた扉の奥の幻滅
躓づいた後本當の我となり
生前の辱知諸賢へ名を残し

禮節を知るに果敢ない貧乏神
同一の線に彼奴と置かれてる
目の前の馘首へ年が狼狽へる
垢ぎれが痛さうにしてトウダンス
美しい胸から乳房掘り出す子
この銀貨今度は何處の手と握手
弗箱の重さで家の床が抜け
理窟より手のはらへ吹殻のせて見ろ
雪を掃く素足の禰宜の古袴
かじかんだ指が密柑をむかんとす

新海南坊句抄

歡迎の花輪に露の稚兒姿
山男先づ歡迎の人に酔ひ
五十年隙間だらけの雨戸なり
ポツチリと花一輪の新世帯
鈴蟲のそばで大きな聲を出し
色里は茜に明けて紅に暮れ
頂門の針も過ぎては糖に釘
軍隊で長屋の倅幅が利き
勝ち軍破顔一笑詩を作り
枕してけふ一日の有難味

城山曉天句抄

青空へ瓦も春の息づかひ
すりも居り刑事も混る花の人
観衆へ踊つてみせる網の鯛
子を抱いて人にとられる螢狩り
圓らかなうたげビールの泡が立ち
空いてゐる社長の椅子へ煽風機
新學期激漉として黒い顔
殴りを我子が走る煽動會
おごそかに淋しく坐る冬の山

かす汗を吸ひく風の音を聞き
肥桶を擔いで恙なき人生
黙々として大根の太りけり
麥として強く素直に麥は伸び
歟ふれば薯の丸さが轉げ出る
労働は冬だといふに汗の玉
ありあまる金で教權弄ぶ
金に泣き金に笑つて人が生き
不景氣で金持の庫金が錆び
法網を潜るになれて金が出来
金の音させるとやをら向きなほり

暗殺史増訂の日がやつてくる
いたづらな石の犠牲に散りし花
大火事のもともちよろく燃え初め
貸す時は極親切な高利貸
留置場叱ると止める革命歌
お百度を踏んで歸れば死んでゐる
猫いらず憎い一人が生き残り
靴の音一步一步へある歡喜
慣習へもろくも理論崩れたり
賢明な奴は黙つて聞いてゐる

失業を背で子供がうれしがり
借用證書へ押す水晶の實印
握り飯呉れる政治をしてくれろ
生きるべくなやみつかれて死なんとす
籠の鳥今放たれた土を踏み
大自然人を残さず抱いてくれ
女房の心が靴の艶へ出る
戒名へ坐りなほした父の顔
なきがらを置いて白々夜が明け
心臓が止つた動かなくなつた

萬歳の今絶頂へ汽笛鳴る（日支事變）
ひえくと慰問袋を縫ふ夜なり
献納の馬朗らかに嘶けり
落陽へ兎も角逃げてからの事
潑刺と陣中手記の字が躍り
激戦記襟を正して讀みました
殉忠の血に塗られたる日本刀
上海が海の彼方にある悲憤
献金へ不景氣風はよけて吹き
喊聲を背負つて支那の奴は逃げ

廣島笑人句抄

初日の出大海原をほしいまゝ
空想は冷たく星の流るゝ夜
後悔を或る夜の夢に置き忘れ
圓かれと思ふ心の角に觸れ
言ひ切つた後におのゝく膝の皺
眠つてる時だけ妥協から逃れ
退屈と背中合はせに死が眠り
白日に曝す温情主義の殻
株が上つても俺達は寒い
闇に陽を求めて枕當てを換え（父病む）

島田欣子句抄

銃口を感じ胸板研へてゐる
 行く先きを知らぬ人等と暮れ残る
 黒髪へ今日も命をあづけたり
 別々な途へ本能唯せかせ
 正確な歩みかすかな音を立て
 見限つた様にグン／＼陽が沈み
 二あつの心組んだりほぐれたり
 爆笑の後へ涙のはふり落ち
 静寂の底で明日が脈を打ち

飯にはなるが人間ぢやない
 闇の色身にしつくりとつきまとひ
 嘲笑を壘に撒いたインキ壺
 人間と花の吐息がからむ春
 一二三で死線を突破
 たつた一言が口火となつた
 誰が模範女工を肺病にした
 七日目七日目の太陽だ
 魂を賣つたその夜の落し穴
 女から涙をとつた日の強み
 死ぬまいとガンバル壘一壘敷

(病中吟)

赤いんぢやない食へないんだ
子守唄泣いた弱身へ突きさゝり
排泄口へ向いて諦らめ堰を切り
燃え落ちるまでを信じた火の力
あつさり手錠で解決した
鐵砲の尖きに追ひまくられた飢へ
けだものを操つる金の支配力
珠を砕いてこれからだ
落ちて行く穴掘りつゞけ掘りつゞけ
從順に草の芽春の陽に媚びる

平井可嘲句抄

救濟のその雄たけびを聞くばかり
ホリモノの腕を捲つて淋しがり
ロポットになれば表彰されるのか
成金と破産と颯ごつこなり
火葬場の道が花見の道に成り
年度末捨てる人油の搾り粕
鍋底にこげつく様な大晦日
過ぎたるは及ばず生きるカルモチン
親といふ名に囚はれて死に切れず
ふんまんを抱いてぢりく泣き寝入り

平澤小柿句抄

大地揺らげば蟲けら同然
 人間の姿を或日おかしがり
 人間の慾の最後の皮下注射
 笑へない事實となつてぶつ倒れ
 あてもなくその日その日を喰ひつめる
 ひたくと打寄す心寄る心
 伸びようとするそれからチョン切られ
 八ツ裂きにされても動く大鰻
 萬年の池で代々鳴く蛙

どぶろくに五臟六腑の大歡喜
 野に生れまろく豊かな濃い林檎
 胴巻の温み己のあたゝかみ
 親と子と同じ會社に只古く
 ぽつたりと落ちた鼻血へあわてる手
 シベリヤの曠野を曲りくねる河
 純情をヂツと守つてゐる素焼
 暗黙のうちに接木の許し合ひ
 泰然と絞らせてゐる赤い牛
 空車挽いて今宵も空車
 敷石の下をはみ出た黄色い芽

姫野大豊句抄

占が當ると俺は殺される
 頬杖は只溜息ののせどころ
 浮躁にも寂しさがある春の人
 宿望へ空しく街の夜開く
 自活する女一輪花を買ひ
 カフェーのコップ氣儘な色に染み
 麗人の爪も師走の風に觸れ
 夏の夜の更れば牙ゆる物思ひ
 蠅の居た處を見てる物思ひ

夜の焚火大入道を背負つてゐる
 春開くこの垣越しの梅の花
 枯枝へ雲さつきから引つかゝり
 雨ある夜せゝらぎめいたトタン屋根
 黄昏の陽へ金色の鯉幟
 秋の色農家の柿が眼に残り
 紅葉の色が落ちそう秋の雨
 徒に開く扇子へ秋が來た
 ゴムバンド痛くなるまで手に忘れ
 病人へ不足を開けば首をふり
 病人の感謝少うし起きかゝり

森田白舎句抄

地上いま宣戦布告の曉の色
死を越えてまた冷酷の世へ戻り
喊聲を擧げて大地の果へ消え
叫喚の果を空しく地へ黙す
手に足に鎖りを解いて夕の膳
新天地てふ美名の裏の大搾取
日輪の愛撫へ光る栗の膚
時は来たその手を離せ俺は行く
没落の一路へ戀が手招ける
餓死するも奴等に頭下ぐるまじ

元木義雄句抄

明鏡を護る心の曇りなく
賑やかな孤獨を月は繰返へし
無技巧な兒等の言葉の持つ眞理
夜となれば籠を忘れて眠る鳥
光陰を踏み踏み波の聯想
ともしびを慕ふ蟲の群れに入り
青春がシャボン玉の中で生き
来る日も来る日もみな底のない日
明るいバツクの欲しい心の繪
月も澄み母のあかるい子守唄

守永天庵句抄

一坪の庭にも朝の露宿り
貧棒のドン底に居る氣の樂さ
一粒の米へ尊き汗を知り
おんぎやいと幸か不幸か又出来る
色々と月を見て居る此の世相
夏冬の着換もなしに猫通し
限りある身命無限の慾を追ひ
農村の不況を語る娼婦殖え
良心の麻痺切つて居る食ふ憶
心中沙汰又三面を賑かせ

鈴木龍芳句抄

玄關に女ばかりの雛の容
三勇士九千萬人血が踊る
風鈴を黙らせて居る新世帯
生活の餘裕造花に夢中なり
新歸朝どちらの親も振り返り
一本の煙草も吸へぬ生活苦
小鳥など飼つて俸級恙なし

速水眞珠洞句抄

どこでどうなつてしまつた流れ星
美しい神祕は星で見る地球
冷めたきは酷暑の中の大倉庫
涼風が動く墨繪の蘭の葉に
朝の目を双手に掬ふ洗面器
鼓膜から來るは疑ふ聲ばかり
現實の不安を吸つて生きるのみ

雑誌賣る爲めに媚びない主義があり
偶像に縋れば土と同じ冷え
金色に衆愚が縋がる釋迦の像
落ちて來る火箭に地軸すこし燃
月を趁ふ道は心の外の道
心中の迹月光がちりばめる
十呂盤の中はこの世の塵ばかり
人の世の冷たき外に氷る酒

目に見えぬ程に机上の冬の埃
冷え切つた手に頂いた暮の錢
怖ろしく物古りて來て法隆寺
手焙の何處かに戀がよみがへり
糸屑の濕つたやうに死んだ蜘蛛
剃りたてのあたまたに秋の手が觸り
人の世を呪ふ塵箱蓋があり
うねくと曠野の道は空へ媚び

夢の方から現實を見極める
北斗星のせて渚へふくれ波
星空へ抜いたビールの物足らず
銀行の金は色けもなく積まれ
結局は金を握れば消ゆる主義
佛壇の中にこの世の不用品
命から命を繋ぐ名醫とや
耳ニツあつて此世が聞こえ過ぎ

一 碧の空から溜る涙壺
焼けるだけ焼けて夕雲闇を吸ひ
力瘤親子で作り合つて生き
敵のあるのが面白い自尊心
燃えたらぬ心を二人阿蘇で死に
華やかに焼けて夕雲はかなけれ
蚊帳釣れば紐に暑さが従いて来る
今日消ゆる不知火ながら吾ながら

落葉した上の落葉の別な夢
一 錢で夢を預けた紙芝居
一本の煙草で空をとり入れる
新聞に出た満月で秋が済み
舌の尖味覺の秋を運んでる
心臓へ今日も濡紙張つて寝る
お茶の葉を噛めば平和になづむ舌
空の色吸うて雨滴れ地に返り

見やうでは紙ばつかりの債鬼なり
 巡禮の歌は梢の霧に消え
 風船の紐にすがつた生活苦
 心臓のほてりがペンへ移りゆき
 博多帯締めれば夏の音をたて
 海へ手を伸ばせば潮が胸に満ち
 大神樂小神樂神の計量器
 鐘撞けば其處らの冬が氷り合ひ

怖ろしき冬を劃する障子張り
 燈籠のほとり平安朝の闇
 登山杖霧に濕つた握り氣味(霧島山)
 噴火口暗くよぎつた鳥が見え(同)
 頂上で麓の水を呑んで居る(同)
 薬草を添えて持つてる登山杖(同)
 高原の風たより合ふ松二本(同)
 山小屋に暗く溪間の水を溜め(同)

山小屋に明るい顔が降りて来る（同）
大まかな山海の風俺の風（同）
禮讚の夏を瞬く星月夜（同）
庖刀にきざまれて居る冬の音
温くさうにお石の太い膝の猫
こともなく石割る鑿の静かなり
おつとりと家を包んだ朝の雪
月をさす指へ古木のやうな冷え
名月の雲はかさねて透かされる

秋風がもう指にある新聞紙
未練なく此世に茶碗われて見せ
煙突に夕陽が赤い罷業團
サポテンは病める悪魔の手にも見え
木魚を撫づれば刺のある身體
神の灯が消えていさゝか暗い春
腹這へば疊に去年の冷が有り
下女の手に残つて春となり
地にまろび地に親しみて消ゆる雪

集の後に

▼自選句集も昭和五年、七年と奇しくも奇數年に刊行せられた順序として、自然第三集の希望を昭和九年に持たせられ、期せずして隔年刊の感を懐かしめらるゝのであるが、吾々は早晚之を年刊にまで漕ぎつけたものと願つてゐる。

▼住居録の添附希望者は縁雨君只一名で、其要なしとせらるゝものが十數名を算したので、今回は之を除外することにした。

▼編輯の都合で多少前後したものはあるが、排列はいろは順にした。同列中に於ては何等後先はない。

▼二頁占有の方は偶數頁に始まつて開卷一覽に便するやうにした。二頁以上も概ね之に倣つた。

▼校正の原稿に忠實であつたことは無論だが明かに誤字脱字と推定せらるゝものは訂正した。東京市内及近縣は間に合ふ限り問合せたが遠隔地までは手廻り兼ねたので或は作者の意思に背くものがないとも云へない。一閱の上相違を發見せられたならば至急申越されたい。劍師の入朱以外校正部の疎漏に因するものは川柳人誌上で訂正することにする。

▼佐藤十九坊君が本集を手になせずして逝かれたことは残念であつた。重ねてこゝに哀悼の意を表示したい。

(名)

新自
川選
柳句
集人三十三百

昭和七年十二月^{十三}日^六印刷
昭和七年十二月十日發行

定價金壹圓

編者

井上劍花坊

東京市中野區沼袋南二丁目一七一番地

發行者兼
印刷者

井上幸一

東京市小石川區戸崎町十四番地

印刷所

片桐印刷所

電話小石川四九二四番

發行所

東京市中野區沼袋南二丁目一七一

柳樽寺川柳會

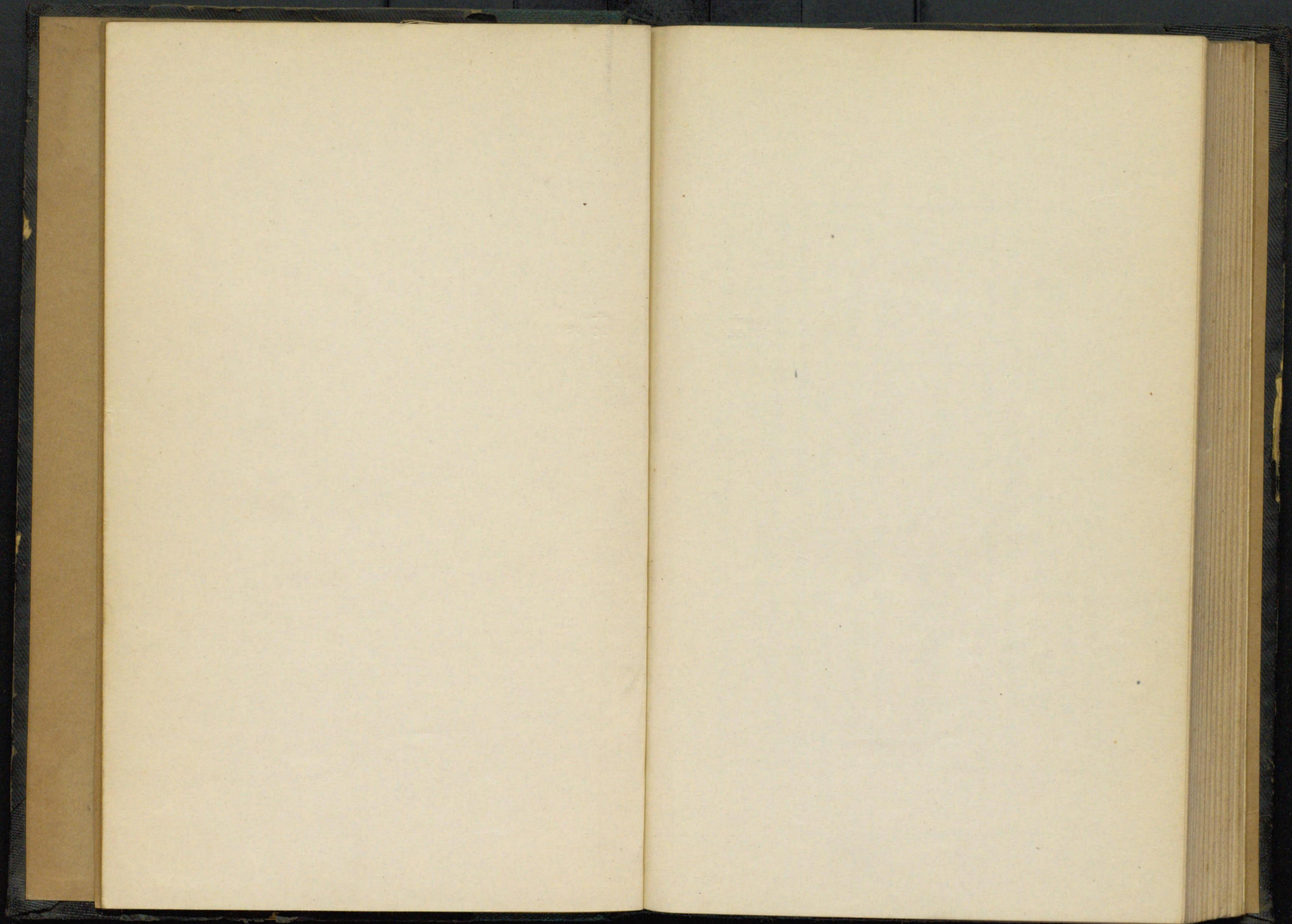
振替東京三三六一番

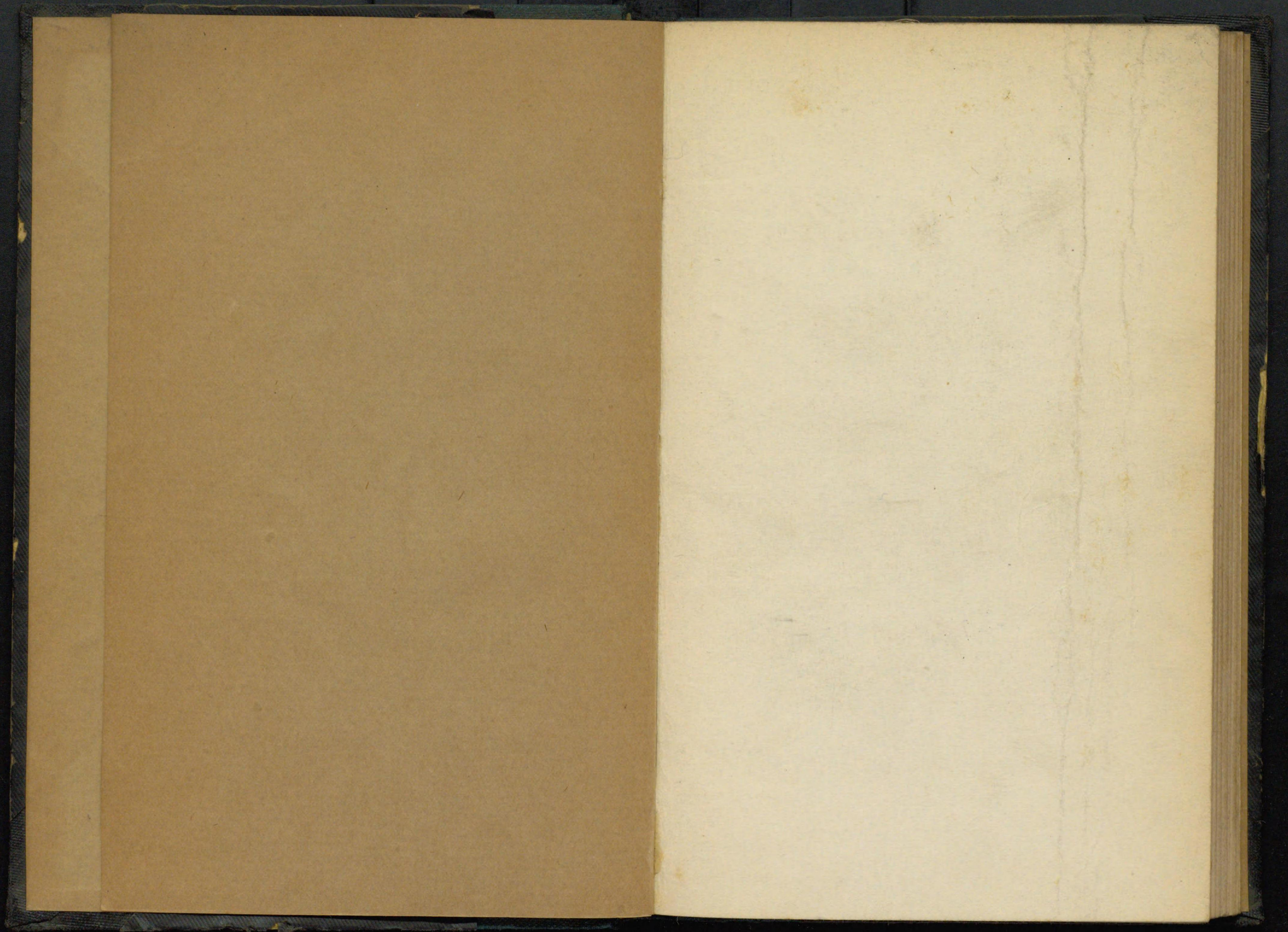
欽定四庫全書		禮部		職官	
職	名	職	名	職	名
禮部	主簿	主簿	主簿	主簿	主簿
主簿	主簿	主簿	主簿	主簿	主簿
主簿	主簿	主簿	主簿	主簿	主簿
主簿	主簿	主簿	主簿	主簿	主簿
主簿	主簿	主簿	主簿	主簿	主簿

欽定四庫全書 禮部 職官

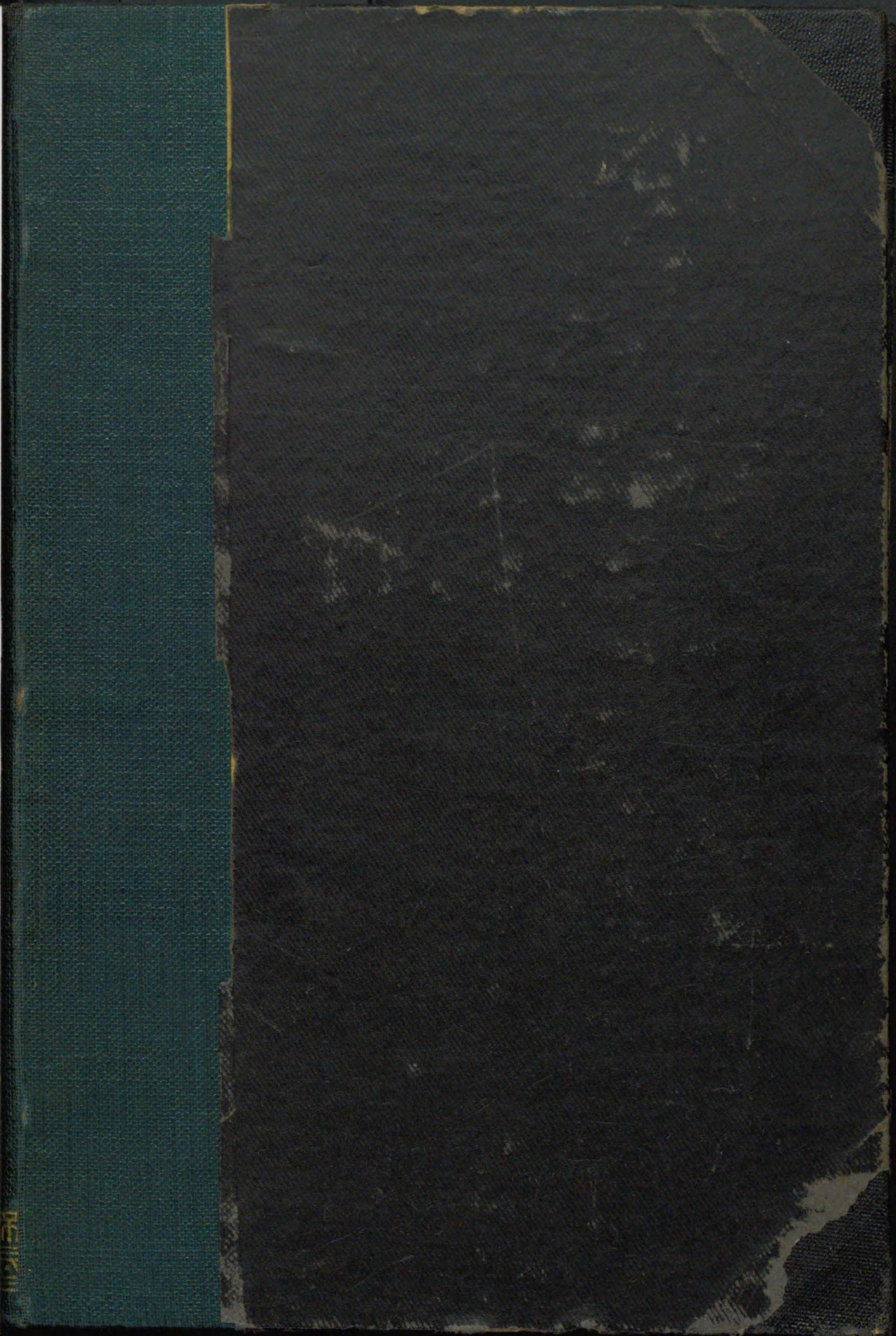
三十三人

禮部主簿





633
91



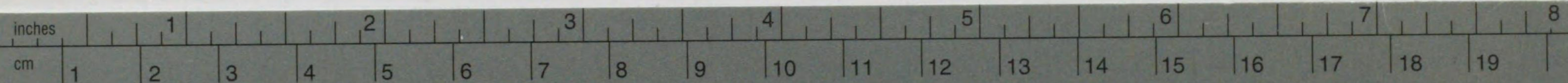
11111111

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

